

ガダマーと新カント派
——「哲学における体系理念について」論文における
初期ガダマーと後期ナトルプの関係——

下山 千遥・下山 史隆（京都大学）

Gadamer and Neo-Kantianism

—On the Relationship between the Early Gadamer's „Zur Systemidee in der
Philosophie“ and the Late Natorp

Chiharu SHIMOYAMA and Fumitaka SHIMOYAMA

The purpose of this paper is to clarify the relationship between Hans-Georg Gadamer and Neo-Kantianism. For this purpose, we focus on Gadamer's criticism of his teacher, Paul Natorp, in his early work “Zur Systemidee in der Philosophie”.

The relationship between Gadamer and Neo-Kantianism is so complex, that Heidegger characterized Gadamer as a Neo-Kantian because of his view of language, when Heidegger read Gadamer's main work, *Truth and Method*, even though Gadamer is now considered extremely influenced by Heidegger. Certainly, Gadamer was influenced by Heidegger, but, even in the early Gadamer, one finds that he is quite different from Heidegger in that Gadamer places a specific importance on the tradition. On the one hand, like Heidegger, he criticizes the concept of “problem history” [Problemgeschichte] of Neo-Kantianism, on the other hand, he is influenced by Natorp, as much as by Heidegger.

The point that Gadamer criticizes in Natorp's thought of problem history is the transcendental subject. Gadamer argues that by identifying the individual with the transcendental subject, Natorp has overlooked individuality, which is always already constrained by “history”. For Natorp, the transcendental subject allows us to speak of “history” as a universal problem, a problem that is independent of time and place. Gadamer, however, insists that the question “what is history” can't be judged without considering the individual and his point of view. Gadamer's view of history is therefore unique in that it differs from both Heidegger's and Neo-Kantianism's.

Keywords: hermeneutics, early Gadamer, problem history, Neo-Kantianism, Paul Natorp

キーワード：解釈学、ガダマーの初期思想、問題史、新カント派、ナトルプ

1. はじめに

本稿では、ハンス＝ゲオルク・ガダマーにおける新カント派の影響関係、特にその批判と継承の観点からこれを明らかにする。その際、われわれは初期ガダマーの論文「哲学における体系理念について（Zur Systemidee in der Philosophie）」（1924年、以下「体系理念」論文）で展開されるナトルプとの対決を主に扱う。この対決の内実とは〈哲学としての哲学史〉、すなわち「問題史」¹を巡るものである。この対決の相貌を検めることで、その後『真理と方法（Wahrheit und Methode）』（1960年、以下WM）で展開されるガダマーの哲学的解釈学が、どのように彼から距離をとることができたかを分析、評価する。その際、ナトルプの評価を軸に、ハイデガーとガダマーの対比からガダマー独自のナトルプに対する態度を明らかにする。ガダマーとナトルプの関係を「体系理念」論文から読み取ろうとする先行研究は Grondin 2010 および Bey 2020 が挙げられるが、これらで取り上げられる両者の関係はあくまで双方の人物史的情報の整理に留まり、思想の内実に踏み込んで影響関係を探ろうとする検討が十分になされたとは言い難い。本稿での検討により、ガダマーの独自性を従来とは異なる観点から浮き彫りにする。

ガダマー解釈学における最重要概念の一つである「適用（Anwendung/Applikation）」が二つの要素、すなわち「普遍性」と「歴史拘束性」によって構築されることをわれわれはすでに指摘してきた。理解される対象とするものの歴史的拘束性による特殊性を損ねることなく普遍的なものを提示可能であるのは、「適用」として記述される理解の運動の一契機があるからである。また、伝統を引き受け構築された「言語」において「地平融合」が可能であるのは、それが〈「事柄」への志向〉を持つからであることも記述した（下山千遥 2023a, 97f.）。

ここで、普遍性と歴史拘束性の調停の鍵となる「事柄（Sache）」は、巻田が指摘するように、ガダマーにおいて極めて多義的に用いられる（巻田 1995, 95.）ことが次なる問題として浮上する。この問題の検討に際し、われわれが提示するのは次である。つまり、哲学的解釈学ないし理解の運動、地平融合への到達の記述において、時代の制約を課された「主観性」との関係からガダマーは「事柄」を見出そうとする。また、こうした「主観性」概念の解釈を通して、論集『ヘーゲルの弁証法』の第六論文「ヘーゲルとハイデガー」（1971年）でガダマーはハイデガーからの離反を試みている（下山千遥 2024）。そしてこの「事柄」概念の検討は、われわれのガダマー読解に大きく寄与するもう一つの側面を照らし出す。つまり、最初期ガダマーの新カント派との対決という側面である。というのも、新カント派の「問題史」的哲学観をガダマーが批判する場においても、「事柄」は重要な立ち位置にあるからである。

¹ 問題史は通例西南学派を徴表する語であるが、マールブルク学派に属するヘーニスヴァルトも用いており、マールブルク学派の哲学史観を指す場合もある。Grondin が指摘するように、ガダマーは後者の意味で用いているため（Grondin 1997, 166.）、本稿で問題史はマールブルク学派、とくにナトルプの哲学史を指すものとする。また、問題史に対する批判は、イエーガーを始めとする発展史と同じく、古代哲学研究に對しても向けられている（WM, 419; GW V, 228）。

本稿でわれわれが提示しようとするガダマー像は、単に反新カント派であり、大まかには親ハイデガーであるがその一部においては離反を試みている、と大掴みに捉えられるようなものではない。ガダマー、ハイデガー、ナトルプの三者の関係性の複雑さを示す一つのエピソードとして、Grondin も提示する次の出来事が、ある書簡を通して確認される。1960 年頃にオットー・ペゲラーに宛てた書簡のうちでハイデガーは、WM を評して、ガダマーが依然新カント派から抜け出せていないということを指摘した。ガダマーが展開する哲学的解釈学においては、「事柄」への志向を持つ「言語」が依然として「超越論的存在」である、この点が、ハイデガーからみれば新カント派の遺物を感じさせるような不満足な点だったのだらうと、Grondin は推測する（Grondin 2010, 97.; Heidegger an Pöggeler, 11. Jan. 1962.）。実際、「事柄」概念はガダマーにとって重要であるだけでなく、その超越論性という点から新カント派にとっても重要なのである。

親新カント派的でありかつ反新カント派的なものである、というように、「事柄」とはきわめて奇妙な概念であることが見てとれる。これらを踏まえ本稿では、ガダマーと新カント派の各々の「事柄」概念の解釈の差異を追うこと——繰り返すが、このとき「問題史」が取り沙汰される——によって、ガダマー解釈学の独自性の一端を示す。まず以下の第2章において、ガダマーによる新カント派評価を、WM やそれ以前、以後の資料をいくらか用いて抽出する。これにより、ガダマーが新カント派、特に後期ナトルプとそこから理解されるマールブルク学派的な学問観をどのような観点から批判していたのか、その輪郭が顕となる。しかしそれと同時に、WM やその周辺の時期、また後年のガダマーの著作や論文について、その批判の具体的内実が明確に提示されることがほとんどないことも明らかとなる。したがって第3章では、ナトルプに対しての受容と批判をかなり直接的に展開している、ガダマーの初期キャリアでの公刊論文である「体系理念」論文の精読、その解釈を行う。ガダマーがナトルプから継承、また批判したエッセンス、すなわちアイデアや思想体系の構造を同定することでガダマーが語る際の「事柄」概念の内実、その独自性が既存の研究と異なる面から照射される。

2. ガダマーと新カント派の関係の概論

本章ではWM やWM 以前・以後の資料を用い、ガダマーと新カント派の関係を整理する。

周知のように、ガダマーは最初ナトルプの下で学び1922年にハイデガーの「アリストテレスの現象学的解釈」、いわゆるナトルプ報告を通じて新カント派から離反する。だが離反といえども、新カント派の要素を自身からそっくり拭い去るのにガダマーが成功した、と簡単に評価を下せるわけではない。WM から晩年に至るまで、哲学史などの様々な文脈において自然科学と精神科学という対比をガダマーは引き続き意識しており、また自然科学の哲学に対する批判の際には、否定的文脈において新カント派の名を度々言及する（Z. B. Gadamer 1993, 16 f.; 1999, 73.）。ハイデガーが新カント派に一蹴的態度を取るのに対し（Z. B. GA III, 7.; GA XXI, 51 f.）、ガダマー

にとって新カント派は容易に取り除きがたい〈躓きの石〉である。両者の新カント派への態度の違いを吟味する際、以下のハイデガーの指摘にも着目したい。「生の問題」を主題的に扱わず、新カント派が「文化哲学」として徴標した近代における精神の産物を称揚したのと同様に、「彼〔ガダマー〕がそれについてきわめて教養深く、最高次に精神的な仕方ですら語らねばならぬところのもの」（Heidegger an Pöggeler, 11. Jan. 1962.）、すなわち芸術や伝統を哲学の問いとした点で、ハイデガーはガダマーを批判した。上掲の書簡からも分かるように、ハイデガーから一括りに批判される新カント派とガダマー、という図式が度々現れるのである。

これらを踏まえ、ガダマーは新カント派をいかに評価したかを概観する。「体系理念」論文、WM、『ヘーゲルの弁証法』でのヘーゲル解釈の記述をそれぞれ追っていくと²、ガダマーは歴史に制約されつつ、普遍を求める態度において絶えずヘーゲルを評価しているとわかる（Z. B. WM, 347.; Gadamer 1924, 59 ff.; 1976a, 22.）。その上で「パウル・ナトルプの哲学的意義」（1955年、以下「意義」論文）でナトルプに対して次のような賛辞を送る。「すでに、〔カント〕『〔純粹理性〕批判』の根本思想のコーヘン的な再発見という試みにおいて、見まがうことのないほどのヘーゲル主義が入り込んでおり、〔それゆえ〕ナトルプの功績は、新カント学派の帰結となる思考の拡張において、フィヒテとヘーゲルの体系衝動を取り上げたということである」（GW X, 380. Auch vgl. WM, 66.）。つまり新カント派に対してガダマーはヘーゲルと同構造的である面で評価する。しかしその一方で初期の「体系理念」論文では、歴史哲学としての新カント派哲学——後述するがこの時念頭に置かれるのはもっぱらナトルプである——を、ヘーゲルを引き合いに出しながら批判している（Gadamer 1924, 59 ff.）。この事態をより理解するため、WMにおける新カント派についての記述を確認しよう。WMにおいて新カント派に言及がなされている全19箇所（WM, 13.; 65 f.; 219.; 224 f.; 250.; 258 ff.; 350.; 381.; 382.; 419.; 459.）においてガダマーはいずれも新カント派を批判的な文脈で言及している。そしてその内容はいずれも超越論的主観性、すなわち「意識の事実」が対象の認識の妥当性を決定するということへの批判と結びついている。

ガダマーにとってのナトルプとの関係は、一方では師弟関係であり、他方では論敵であったという両側面からも受け取れるように、簡単に親／反と判断できない微妙なものである。例えば、ガダマーはWM執筆直前にナトルプ生誕100周年の機とはいえ先の「意義」論文でナトルプを評価している。また、ガダマー本人による自伝の中でも懐古しているが、ナトルプの指導を受ける中で、『一般心理学』（1912年）でナトルプが主題とし、「意義」論文でガダマーが強調した「個性性」について両者は盛んな議論を交わしていた、と報告されている（Gadamer 1977, 17.）。先んじて述べるならば、本稿の次章において、この「個性性」すなわち「個人」が両者の争点となっていることが明らかとなる。

ガダマーとナトルプの、簡単な対立構造で捉えられない微妙な関係は、主に超越論的主観性に対する問題から生じる。新カント派研究者であり、かつナトルプ『一般心理学』の編者であるLuftは、同書の序文でガダマーによる「超越論的自我極」の言及を取り上げる。Luftの見方

² ただし、本稿では紙幅の都合上、ガダマーのヘーゲル解釈の妥当性自体を問わない。

に則すると、ナトルプはカントの解釈を通して「超越論的自我極」（WM 249）を獲得した、とこのようにガダマーは理解していたのである（Luft 2013, xxviii.）。だが、ガダマーはナトルプにカントを超える意義を見出している。ガダマーからすればナトルプは、意識の「体験」（Erlebnis）を自我の直接的な事実として扱い、その「体験」の総体、すなわち「原体験」が自我となる点で、フィヒテ、ヘーゲルの衣鉢を継いでいるとガダマーは評価する（WM, 74.; 66.; GW X, 380.）。

ここでわれわれは、ガダマーがナトルプに見てとった固有の「生」を生きる「個体」としての「超越論的自我極」を着目点の一つとする（Natorp 2013, 33 f.）。ガダマーがこのアイデアをいかにして相手取り、どのように反駁するのかをわれわれは追尾する。この時ガダマーがナトルプへの批判のために導入するのが、「作用史的意識」の発想である。すなわち、超越論的な立場に据えられるような自我を求めるナトルプに対し、そのような自我がもつ意識の歴史拘束性からの逃れられなさをガダマーは強く打ち出す。だが WM では、このようなガダマーによるナトルプへの批判の内実は明瞭であるとは言えない。というのも、ガダマーはその際ナトルプの自我概念と歴史性への問いを明確に結びつけてはいないからである（WM, 249.）。ガダマーによる記述からこの批判の具体的内容を取り出すために、われわれは最初期ガダマーの「体系理念」論文を用いて考察をすすめよう。「体系理念」論文の構造自体は WM と通底しており（巻田 1999b, 127.）、しかも WM より明確にナトルプへの批判を見通すことができるのである。

3. 「体系理念」論文にその原型が見出される「作用史的意識」と「事柄」の関係——「個人」・「問題史」・「普遍性」

本章では、「体系理念」論文でのガダマーの記述を追い、ガダマーとナトルプの間での差異と共通項をより鮮明に浮かび上がらせることを試みる。この操作によって以下の考察が得られる。学問のうちでの探究を限界づけ統制する「理念（Idee）」としての「問題」があり、これを問う超越論的自我（極）がある。この図式から「問題史」的哲学史観をナトルプは提示する。一方ガダマーはこうした自我概念を批判し、自我による意識の歴史拘束性を強調する。このことから、理念としての問題の自存性もまた否定される。ここから、事柄へと向かう探究に現れる、事柄の〈問いとしての価値性（Fragwürdigkeit）〉と探究する主体の「作用史的意識」から、いかにして〈事柄へ向かう態度〉が特徴づけられるかという課題が提示される。

(1) ナトルプの「個人」と「問題史」との関係

まず WM にて、理解現象を記述する際に導入される一つの要素として、「作用史的意識」が提示される。この概念を説明すれば、それは「伝承が経験となりうる」（WM, 367.）意識、また「伝承において出会う真理要請（Wahrheitsanspruch）に開かれ続ける」（ebd.）意識である。これを介することではじめて、理解が「事柄」へと向かうことが可能となる。

第2章でも Luft の解釈にも触れて確認したが、WM や「意義」論文時点でのガダマーによれ

ば、ナトルプは意識体験を主体の事実として扱う点ではカントを越え出ているとして肯定的に評価している。一方で、ナトルプの哲学史観や学問観を構成する探究主体、すなわち「超越論的自我（極）」には、「作用史的意識」（強調引用者）というときの歴史意識が欠けているという。この「作用史的意識」は、「体系理念」論文の時点では未だ概念として登場してはいない。しかしナトルプが歴史哲学の中で消極的なものとした「個人」への批判からは、その原型が見出せるとともに、上記の批判と乗り越えの内実が、より直接的に言及される（Gadamer 1924, 74.）。

ガダマーの「個人」概念批判に先立ち、ナトルプの「個人」概念を確認する。講義録遺稿『哲学的体系学（*Philosophische Systematik*）』（1924年頃）における歴史哲学論で、歴史的な事実と探究の「問題」となる事実がこれまで区別されてきたことにナトルプは異を唱える。むろんここで念頭に置かれているのは歴史学を「個性記述的（ideographisch）」とし、自然科学を「法則定立的（nomothetisch）」と区別した、西南学派の哲学である（Natorp 2000, 328.）。ナトルプにとって両者は相互依存的であり（Natorp 2000, 323.）、西南学派の区分への批判を経て、科学の法則性と歴史の法則性が一致することを主張する。だがこの時の「個人」は歴史的なものからは切り離される（Natorp 2000, 322.）。

したがって「個人」は、「歴史」ひいては「問題」を探究する際には全体としての自我、つまり「共通自我（*Gemein-Ich*）」に最後には還元されてしまうものとして捉えられている。ナトルプは、法則ないし歴史をメタ認知する哲学を通じて、個人が「自己性、それどころか能動性、自発性」を獲得すると考える（Natorp 1918, II, 117 f.; Pfeffer 1997, 203 ff.）。そのため、哲学的認識としての〈心理学〉が自発的な認識を可能とすることが帰結される（Natorp 2000, 383 ff.; 2013, 54 f.; 208.）。ナトルプにとって個人は常に「共通自我」に回収され、存在論的に規定されかつ認識論的な機能を持つ「自我」となるのである（Natorp 2013, 225.）。

ナトルプにとって、この「自我」がまさしく哲学の「問題」の根拠をもたらす（Natorp 2013, 33 f.）。「自我」としての「認識」主体が——社会的教育を通じて——歴史に対峙し、また歴史に巻き込まれる。ここで問われるべきだと考えられているのは、「事柄」＝「問題」に取り組むこの「私」＝「われわれ」と歴史との関係である。ここでのナトルプの「哲学としての哲学史」を「問題史」という概念を用いてガダマーは把握する（Grondin 2010, 101.）。「体系理念」論文はこうしたナトルプの認識論を前提とするが、本稿第1章冒頭で述べたように Grondin 2010 および Bey 2020 はその点を扱っていない。この点を含めて「体系理念」論文を再構築していこう。

（2）ナトルプの「問題史」を批判・継承するガダマー——ハイデガーとの対比から

「体系理念」論文でのガダマーによるナトルプの「問題史」への批判を分析すると、そこにはハイデガーとの共通点とハイデガーからは見出せない独自の視点とを見出すことができる。前者について、ハイデガーは教授資格論文『ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論』や所謂ナトルプ報告「アリストテレスの現象学的解釈」等において問題史批判を行っている。これらでの批判の要点を述べると以下となる。ハイデガーは、ナトルプが「歴史とは常に何かの歴史」であるというとき（Natorp 2000, 320.）、そこに哲学史と他の科学の歴史との等置をみる。これを

批判してハイデガーは、有限で歴史的な実存の「事後的生」が哲学することでのみ哲学史が捉えられると考える（GA I, 195 f.; GA LXI, 1 ff.; GA LXII, 347 f.）³。

ハイデガー的問題史批判の姿勢は、上述のように 1922 年のナトルプ報告からかなり影響を受けていたガダマーにおいて、次のように引き継がれている。「こうした体系的に方向づけられた方法論の内的自己矛盾には、その遂行能力が対応する。つまり、その遂行能力がそれに固有の要請に十分である限りで、必然的に事象への暴力を加えるのである」（Gadamer 1924, 66.）。「具体的な問題探究におけるその主旨は、その都度の問題の位置を開いておくために、探究の成果を統一的な体系へと性急に切り詰めることすべてに対して抵抗することである」（a. a. O., 68.）。つまり、ガダマーは、たとえば自我の概念をあきらかにする際、個人を廃棄して、その普遍性を求める態度のために、個人の探究も捨て去られることに対して批判する。またガダマーが「そうして、第一義において個別の問題への着手はそれ自体で偽であることも真であることもなく、ある根源的で個人的な事柄の関係から生起する問題が真なのである。この問題がラディカルになればなるほど、問題の形成は客観的真理の意味に接近する」（a. a. O., 73.）というとき、ここにはハイデガーの姿勢、すなわち、生が哲学史に接近するとき、己の現在からそれに接近可能であるという姿勢との連続が容易に見てとれる。このことから、ガダマーは解釈主体の「歴史性」が問題史に欠如しているという指摘においてハイデガーと共通だといえる。

だが、この「歴史性」の捉え方においてガダマーはハイデガーと袂を分かť。「存在の歴史の破壊」によって歴史から抜け出すために、「生の価値として妥当し、機能するという要求」（GA XXI, 195.）に哲学の独自性を見出すハイデガーとは別の仕方ではガダマーは歴史を思考する。「[…] ——生き生きとして確実な伝統という意味において、あるいは問題の事柄的な基礎へのある固有のラディカルな遡及によって——そのつど現存在に向けて規定する態度の、それとともに動き、それを理解するような仕方での習得が遂行され、それによって、含み込まれた問いの方向の制約が、それとともに動き、ともに見通されるものであるとき、その接近が可能になるのである」（Gadamer 1924, 70.）。ハイデガーは所謂 *tractatus* 形式という中世哲学の伝統承認システムに生の欠如を見る（GA XXI, 199.）⁴。しかし、むしろガダマーは「生き生きとして確実な伝統」として伝統を積極的なものとして捉える。まさに伝統に巻き込まれることによってわれわれが事柄へと接近する可能性を示すのである⁵。こうした意味でハイデガーとガダマーを同型とみる Bey の解釈は限定的なものである（Bey 2020, 465.）。本稿で以下に示すが、ハイデガー

³ ハイデガーは 1921/22 年冬講義「アリストテレスの現象学的解釈」で、新カント派はカント哲学を自然科学の哲学的基礎付けとしたと述べている（GA LX, 4.）。このことから、「新カント派」として名指されるものはマールブルク学派だと考えられる。

⁴ ハイデガーはここで *tractatus* という語を用いていないが、定義上同箇所念頭においているのはこの形式であると言える。*tractatus* の概念については次を参照（Crutius 1993, 228 f.）。また「ナトルプ報告」でハイデガーは、*fragwürdig* を実存の事実性の可能性を発見する契機とする。しかしこの場合は世界への頹落、ないし伝統から脱するための契機を意味している（GA LXII, 361.）。

⁵ このことは教授資格論文の 1931 年の序文で「事柄そのもの」という語の内容とも符合する（GW V, 158.）。

は自身の哲学史解釈において脱歴史主義的傾向を保持するが、ガダマーは部分的にその反復性を認め、反復性から見出されるそのつどの時代の一回性を重視する。

「伝統」への積極的評価から、のちに「作用史的意識」が考えられる。これらの考えはナトルプ批判として展開され、そこでは先ほども触れた「問題史」での「個人」のあり方が特に争点となる。ナトルプは、哲学における普遍の探究を介して個人に要請されるのは、「共通自我」となること、非歴史的な、自律的人格となることだとする。しかしガダマーにとって、個人が問題に取り組む際に否応なく歴史ないし伝統に巻き込まれる（Gadamer 1924, 66.）。ガダマーは「個人」を非歴史的、もしくは超越論的なものとして措定するのは不適切だと指摘する。

ここで着目すべきなのは、ガダマーはあくまで問題史を深化させる形で議論を展開する点である。こうした歴史的制約に組み込まれた個人が、それでもなお伝統における問題圏にありながらも、「問題の存続にそのつど見られうるもの（das jeweilige Gesehenwerdenkönnen der Problembestände）」（a. a. O., 61.）としての「事柄」に、〈問いとしての価値性（Fragwürdigkeit）〉を見出す⁶。ガダマーは「体系理念」論文でこのような「個人」像を提示する。また「世界経験における世界と現存在の實在的な同一性を害することなく、そこで世界が哲学的人間に与えられるところの問題の内実は、そのつど新しいのである」（a. a. O., 62.）というとき、「そうした哲学史に対する態度〔問題史〕は、すべての歴史において固有の問題を伝承された語の類似点から再認識する傾向が歴史的一回性を正しく評価しないのと同じく、非哲学的である」（a. a. O., 74.）⁷として、問題史批判は、そのオルタナティヴとしての「歴史的一回性」の重視の正当化へと結びつく。このような批判を打ち出す一方で、ガダマーはまだ自らの積極的な主張を提示できていない。つまり、ナトルプが歴史（＝問題史）を問題の発見の契機として扱ったように（Natorp 1925, 527.）、〈問いとしての価値性〉は事柄の発見の契機である。しかし、これは「事柄」それ自体が何かという問いに答えてはいない。

（3）「体系理念」論文から見出される、ガダマーの「事柄」概念の検討

⁶ この点に関して後年ガダマーはフロネーシス概念を軸にカントないしプラトンとアリストテレスの対比で再論し、「ソクラテス的問い」に接続させる（下山千遥 2023b, 86.）。しかし、ナトルプの問題史批判から見いだせる問いと古代哲学研究との連関が明確に言及されるのは「プラトンとアリストテレスの間の善のアイデア」（1978 年）を待たねばならない（GW VII, 131.）。

⁷ これは後年の「哲学としての概念史」（1970 年）でも同様の記述を見ることができる。しかし、「哲学としての概念史」は本稿で問題としているような解釈主体の資格については触れていない。またリッター、コゼレックらの概念史派が編んだ論集に掲載されていることから、主として言語の問題が扱われている。Grondin 2010 および Bey 2020 は「哲学としての概念史」を起点として、「体系理念」論文の問題史批判から示されるガダマーの歴史観を「概念史」として示している。しかしわれわれのみとすると、ガダマーは概念史モデルとは異なる史観を提示している。つまり、歴史的命題は真であるということを前提とし、それがいかにしてコンテクストによって正当化されるかを探究する概念史ではなく、ガダマーはすでにその命題を正当化してしまっている解釈主体から歴史を論じる。そのため先行研究で「概念史」という定式化には留保が必要である。

では、この「事柄」とは何だろうか。それは、ガダマーにとって「個人」の〈事柄へと向かう態度〉、その反省的態度それ自体である、といえる。つまり、事柄へと向かう態度それ自体が事柄そのものの定立である。

問題史批判の観点からみれば、「個人」が正しい判断を行うことが可能だとするナトルプへの批判としてこのことが示される。「個人」、すなわち歴史を解釈する主体は歴史拘束的である。解釈主体が歴史（ないし伝統）に巻き込まれていることの自覚から、普遍的なものへの〈問いとしての価値性〉を介し、「事柄」の妥当性が「態度」そのものによって保障される（Auch vgl. WM, 219.）。ナトルプにおいて主体は「無限の課題」としての理念に必然的に向かい、そのとき主体は超歴史的となる。しかし、ガダマーからすれば主体が有限な認識を持つ限りで、向かうところの事柄は歴史拘束的である。したがって、マールブルク学派的な「無限の課題」としての理念のように、向かう先が普遍的なのではなく、歴史としての理念に向かう態度を含めて立てられる課題こそが、普遍的かつ歴史拘束的とならねばならない。

だが他方で「現代の哲学の最もアクチュアルな問い、すなわち個体化の原理の問題を解決する」というナトルプからの引用のうちに、ガダマーがナトルプ哲学の意義を認めたのも納得できる（GW X, 379.）。「個体化の原理」とはここでは「個人」が成立する原理を指すが、このようにガダマーがナトルプを評価するのは、「歴史」の捉え方は異なるにせよ、ナトルプの議論に則することで普遍に対する〈問いとしての価値性〉が見出されるからである。だが、ナトルプが理性の普遍性から個性の保証を見出したのに対し、ガダマーにとっては歴史拘束的な問いの態度が「事柄そのもの」になる。いわば個人が会おう普遍と歴史の相克から「事柄」が見いだせる。それゆえにガダマーは新カント派に対しアンビヴァレントな評価をしていると言える。

4. おわりに

ガダマーは常に新カント派の超越論的主観性に対して、それが超歴史的であるという批判を向けつつ、一方でナトルプ的な主観性それ自体の構造を保持していることが、以上の議論から明らかとなった。本稿第1章で挙げたガダマー自身の独自性という観点で整理すると、以下となる。新カント派、とりわけナトルプの「問題史」は学問全体がなす試みを哲学という形で取りまとめ、そのまさに理性の運動としての哲学がどのように歴史を形成してきたのかということに叙述したものであった。しかしガダマーは「体系理念」論文の時点で、「問題史」に歴史という名を冠していながらも歴史そのものがもつ特殊性、あるいはその特殊性を生み出す人間の有限性という観点が欠けていることを問題視していた。こののちにガダマーは、WMでも見られるように、人間の有限性を含め、それを積極的なものとみなした哲学としての哲学史、すなわち精神科学の方法としての解釈学を構想する道を辿る。この時の道具立てが「地平融合」「適用」、そして「作用史的意識」や「事柄」などとしてWMで登場するのである。

またハイデガーとの対決という観点からみれば、人間の有限性という点をハイデガーから引

き継ぐ一方で、伝統の固守という点で新カント派の枠組みをガダマーは引き継ぐ。この点でハイデガーのように個人の実存によって伝統を超えるのではなく、個人から生じる問いのあり方と伝統の相互関係から「事柄」をとらえ直そうとするガダマーは、歴史性の評価という点ではきわめて先駆的であった。このそれぞれ対立する派閥から共通点と相違点を持つという態度、自身と対決相手の間を縫って構成される思索の〈方法〉こそが、ガダマー哲学の独自性である。

凡例

Gadamer, Hans-Georg

GW: *Gesammelte Werke*, Tübingen.

WM: *Hermeneutik I: Wahrheit und Methode. Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik (Gesammelte Werke 1)*, Tübingen 1990.

Heidegger, Martin

GA: *Gesamtausgabe*. Text der Einzelausgabe mit Randbemerkungen aus Handexemplar des Autors, Hrsg. v. Friedrich-Wilhelm von Hermann, 103 Bde., Frankfurt a. M.

一次文献

Gadamer, Hans-Georg(1924); Zur Systemidee in der Philosophie, in: *Festschrift für Paul Natorp: Zum siebenzigsten Geburtstag von Schülern und Freunden gewidmet*, Berlin/Leibniz, S. 55-75.

--(1976a); Über das Philosophische in den Wissenschaften und die Wissenschaftlichkeit der Philosophie, in: *Vernunft im Zeitalter der Wissenschaft: Aufsätze*, Frankfurt a. M., S. 7-31.

--(1976b); Hegels Philosophie und ihre Nachwirkungen bis heute, in: *Vernunft im Zeitalter der Wissenschaft: Aufsätze*, Frankfurt a. M., S. 32-53.

--(1977) *Philosophische Lehrjahre: Eine Rückschau*. Frankfurt a. M. [(1996 年) 『ガダマー自伝——哲学修業時代』、中村志郎訳、未来社]

--(1980); *Hegels Dialektik: Sechs hermeneutische Studien*. 2. vermehrte Aufl., Tübingen. [(1990 年) 『ヘーゲルの弁証法——六篇の解釈学的研究』、山口誠一・高山守訳、未来社]

--(1993); *Über die Verborgenheit der Gesundheit: Aufsätze und Vorträge*. Frankfurt a. M. [(2006 年) 『健康の神秘——人間存在の根源現象としての解釈学的考察』、三浦國泰訳、法政大学出版局]

--(2000a); Die Philosophie und ihre Geschichte, in: *Hermeneutische Entwürfe*. Tübingen 2000, S. 69-96.

二次文献

Bey, Facundo (2020); Al encuentro con Platón: los primeros pasos de Gadamer en Marburgo (1919-1928), in: *Anales del Seminario de Historia de la Filosofía*, Bd. 37, Heft.3, S. 457-472, Madrid.

Crutius, Ernst Robert (1993); *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Basel.

Dufour, Eric(2013); Le concept d'histoire chez Natorp, in: *Der Begriff der Geschichte im Marburger und südwestdeutschen*

- Neukantianismus*. Hrsg. v. Christian Krijenen u. Marc de Launay, Würzburg, S. 87-98.
- Grondin, Jean (1997); Der junge Gadamer und Richard Höningwald, in: *Erkenntnis - Monas - Sprache: Internationales Richard-Höningwald-Symposion Kassel 1995*. Hrsg. v. Wolfdietrich Schmied-Kowarzik, Kurt Walter Zeidler, u. Wolfgang Marx, Würzburg, S. 159-170.
- (2010); The Neo-Kantian Heritage in Gadamer, in: *Neo-Kantianism in Contemporary Philosophy*. Hrsg. v. Rudolf A. Makkreel u. Sebastian Luft, Bloomington/Indianapolis, S. 92-110.
- (2013); *Hans-Georg Gadamer: Ein Biographie*. 2. Aufl. Tübingen.
- Heidegger, Martin u. Otto Pöggeler(2021); *Briefwechsel 1957-1976*. Hrsg. v. Alfred Denker, Freiburg.
- Luft, Sebastian (2013); Einleitung. In: Natorp; *Allgemeine Psychologie nach kritischer Methode*, Darmstadt.
- Natorp, Paul (1918); *Deutscher Weltberuf: Geschichtsphilosophische Richtlinien*, Bd. 1, Jena.
- (1921); *Die logische Grundlage der exakten Wissenschaften*. 2. durchgesehene Aufl. anastatischer Nachdruck. Leipzig/Berlin
- (1925); *Vorlesungen über praktische Philosophie*. Erlangen.
- (2013); *Allgemeine Psychologie nach kritischen Methode*. Hrsg., kommentiert u. mit einer Einleitung versehen v. Sebastian Luft, Darmstadt.
- (2000); *Philosophische Systematik*. Mit der Gesenkrede zum Geburtstag am 24. 1. 1954 von Hans-Georg Gadamer, Einleitung u. Anmerkungen von Hinrich Knittermeyer, Hamburg.
- Pfefer, Franziska(1997); *Individualität: Ein kritischer Vergleich zwischen Wilhelm Dilthey und Paul Natorp*. Aachen.
- 下山千遥 (2023a) 「ガダマーの解釈学における地平の歴史拘束性の徹底についての考察——R. ローティを導き手として」『アルケー』(31)、関西哲学会、88-99 頁。
- (2023b) 「ガダマーにおける〈適用-フロネーシス〉の関係性——『真理と方法』前後の比較を通じて」、『人間存在論』(29)、79-89 頁。
- (2024) 「ガダマーの「地平融合」概念におけるヘーゲルの弁証法理論の影響についての考究」『Heidegger-Forum』(18) (刊行予定)
- 巻田悦郎 (1999a) 「ガダマーの事柄概念」『東京理科大学紀要 (教養篇)』(31)、83-98 頁。
- (1999b) 「解釈学と歴史主義：歴史主義に対するガダマーの態度と哲学的解釈学の成立」『東京理科大学紀要 (教養篇)』(32)、125-140 頁。